

# 日本教育テレビの番組編成における「ワイドショー」の変化 The historical change of News-show in Nippon-Educational -Television program

◎木下 浩一  
Koichi KINOSHITA

京都大学大学院教育学研究科 Graduate School of Education, Kyoto University

**要旨**・・・本研究では、テレビ朝日の前身である日本教育テレビ（NET）の番組編成の変化を、「ワイドショー（ニュースショー）」に絞って明らかにした。日本教育テレビのワイドショーは、主婦を中心とした受け手と送り手の双方が教養的に捉えており、番組編成上急速に拡大した。拡大に伴って多くのテーマや内容が必要となったが、それらを提供したのは視聴者であった。ワイドショーという「教養」が拡大した大きな要因は、その定義の曖昧さと視聴率という指標の明確さであった。  
**キーワード** 商業教育専門局、番組調和原則、教養番組、視聴率、主婦

## 1. はじめに

### (1) 研究の目的と対象

本報告の目的は、テレビ朝日の前身である日本教育テレビ（Nippon Educational Television）の番組編成の変化を、ワイドショーというジャンルに絞って明らかにすることである。日本教育テレビが本放送を行ったのは1959年から1973年の約15年であるが、その期間は最大5局の商業教育専門局・準教育局が放送を行っており、公共放送であるNHK教育テレビと併せて、教育テレビが並存した世界的に稀有な状況にあった。番組編成を送り手と受け手の相互作用の結果として捉えれば、日本教育テレビの番組編成の変化から、マス・コミュニケーションにおける商業性と教育性・教養性との関係が析出できると考えられる。

一方で番組編成は、総体として膨大であり、その変化はマクロに捉えられることが多かった。本研究は日本教育テレビというひとつの送り手の番組編成において、ひとつのジャンル、具体的には送り手と受け手の双方が教養的にみているワイドショーの変化を追うことで、知見の析出を試みた。

### (2) 先行研究との差異、研究方法

本研究はメディア史研究、なかでもテレビ史研究であり、日本教育テレビに着目した送り手研究であるといえる。番組編成への着目という点においては、番組編成研究でもある。さらに、ワイドショーというジャンルに焦点を絞ったことから、ワイドショー研究ともいえるだろう。以下、日本教育テレビ研究・番組編成研究・ワイドショー研究の三つの領域における先行研究を概観し、それら先行研究と本研究との差異を述べる。

第一の日本教育テレビ研究としては、佐藤卓己が『テレビ的教養：一億総博知化の系譜』（NTT 出版、2008）において、日本教育テレビ設立の経緯や新聞による民放ネットワークの系列化などに言及している。古田尚輝は「『鉄腕アトム』の放送に関する時代考察：編成と産業の視点から」（2005）において、日本教育テレビの経営母体のひとつが東映であったことから、日本教育テレビと映画や動画との関係を明らかにしている。この他、日本教育テレビのドキュメンタリーやドラマなどの個々の番組については、各コンテンツ論において言及されている。

第二の番組編成研究としては、1960年代に後藤和彦が番組編成論を試みていたが、その後、番組編成研究は一種のアポリアに陥っていた。佐田一彦ら（1976, 1981, 1984）は、NHKを含めたすべての地上波キー局を対象に、3回にわたって大規模なマクロ比較を行っている。松井英光（2015）は、編成部（局）という送り手内部の組織に着目し分析を行っている。

第三のワイドショー研究としては、石田佐恵子が『有名性という文化装置』（1998）において、日本における「ワイドショ

一」というジャンルの成立過程を明らかにしている。石山玲子ら（2005）は、ワイドショーの番組構造を分析している。

古田（2005）の仕事は、第一の日本教育テレビ研究と第二の番組編成研究にまたがるものである。すなわち、日本教育テレビという送り手に着目した上で、その番組編成における映画や動画関連の変遷を史的に分析している。本研究は、手法としては古田のそれに近いが、分析対象のジャンルをワイドショーとした点が異なる。ワイドショー研究としては石田の先行研究が参考になるが、石田は「ワイドショー」というジャンルそのものの成立過程を明らかにしたのに対して、本研究はワイドショーを操作的に定義し、その番組編成上の変化をみている点が異なる。石田はキー局を中心とした地上波全局を対象としているが、本研究は日本教育テレビのみであり、分析期間についても15年前後と石田より短い。

本研究におけるワイドショーの定義は、「一人ないしは複数の司会者が出演し、番組の長さが1時間程度以上の番組で、複数の曜日に同一タイトルで編成され、その内容は複数のコーナーから構成されるが、一方で突発の事故などの対応時には内容が速やかに変更され、制作上想定される視聴者が意図的に限定されている番組」とする。

研究手法は史的アプローチを採用する。主な資料は、朝日・毎日・読売の一般紙三紙と、テレビ朝日社友会の会報である『テレビ朝日社友報』である。前者によって広さを、後者によって深さを得たが、後者への着目も本研究の特徴である（これら以外に雑誌・回顧録なども広く渉猟した）。また、送り手の言説への着目も先行研究と異なる点である。

## 2. 開局直後の日本教育テレビにおけるワイドショーの試行

1957年、日本教育テレビは、免許申請の一本化作業を経て発足した。大株主は、旺文社・東映・日本経済新聞であった。初代社長には旺文社社長・赤尾好夫、初代会長には東映社長・大川博が就任した。評論家の塩沢茂は大川の経営理念について、「進学雑誌とテキストによって一代で旺文社を築いた赤尾とは対象的な現実主義ということは周知のことだった」<sup>1</sup>としている。

1959年2月、日本教育テレビは本放送を開始した。開局直後の日本教育テレビは、企画の貧困に苦しんでいた。一方で、日本教育テレビの編成部員であった長谷川創一は、「ユニークな企画にはどんどんゴーサインが出た」<sup>2</sup>と回顧している。

教育専門局であった日本教育テレビは、教育番組53%以上・教養番組30%以上の放送を、免許の付帯条件として義務付けられていた。実際の番組表にも、多くの教育・教養番組がみられた。1959年6月の新聞紙上のプログラム欄には、《百万人の英語》《料理学校》《働くよろこび》《服装教室》《科学豆知識》《小唄教室》《美術入門》《おしゃれコーナー》《時事放談》《TV百科事典》などが見られるが、それらは20分以下の番組であった（以下、番組名は《 》内に表記）。教養的な番組は、総じて視聴率的には振るわなかった。

しかしながら、この時期の教養的な番組が、すべて低調だったわけではない。《コーヒー教室》という教養番組では、第一回の放送後に2,500通の手紙が日本教育テレビに届いた。《コーヒー教室》の制作者は、後に《木島則夫モーニングショー》を立ち上げる浅田孝彦であった。レギュラー番組として成立するためには予算的裏付けが必要であったが、広告モデルを採用した日本教育テレビにおいて、それはスポンサーを意味した。《コーヒー教室》には、コーヒーメーカーが提供を申し出た。

日本教育テレビが開局した1959年当時、ワイドショーという言葉はほとんどみられない。新聞紙上などでは「ニュースショー」と呼ばれており、1980年代に入ってもニュースショーという言葉がみられる（本稿においては便宜上、以下ワイドショーに統一する）。1959年頃、他局においてワイドショーの試行がなされているが、開局当初の日本教育テレビでも、「モーニング・ショーの原点ともいうべき『〇月〇日』という帯番組」<sup>3</sup>が編成された。制作者は、後に《アフタヌーンショー》を制作する江間守一であった<sup>4</sup>。帯番組とは、複数の曜日にわたって同じ時間帯に放送される番組であったが、《〇月〇日》は12分という短い番組ながら、全曜日にわたる画期的な帯番組だった。

安定した大企業のスポンサーは、日本テレビとラジオ東京テレビによって困り込まれていた。後発の日本教育テレビは打開策として、中小のスポンサー獲得を目指した。日本教育テレビがそのためにとった方策のひとつは、《東京アフタヌーン》で試みられた、ディレクターとテーマの分断であった<sup>5</sup>。この分断は、テーマや内容の自由度を飛躍的に高めると同時に、中小のスポンサーによる部分的な番組提供を可能とした。分断されたテーマや内容を、番組上まとめるのは司会者であったが、その司会スタイルは、すでにラジオで定着していたディスク・ジョッキーであった<sup>6</sup>。後年NHK放送文化研究所は、《木島則夫モーニングショー》の視聴形態を「分断視聴」と呼んだ<sup>7</sup>。制作者の浅田は元雑誌編集者であり、多様なテーマは雑誌的でもあった。分断視聴は、「自分の関心に合うところだけつまみ食い的に見る」ことを可能にした<sup>8</sup>。

同年、浅田は《テレビ週刊誌ただいま発売》（以下《テレビ週刊誌》）を制作している。《テレビ週刊誌》は、「ブームに乗る週刊誌をそっくりそのままテレビで再現しようという新番組」<sup>9</sup>であった。《テレビ週刊誌》は週1回の放送であり、浅田はそのデメリットを、「放送されてみると、その素材がいかに古びてみえ」<sup>10</sup>と述べている。

### 3. 日本教育テレビにおけるワイドショーの誕生

1964年4月《木島則夫モーニングショー》の放送が開始された。同番組は月曜から金曜の帯番組で、朝8時30分から1時間の生放送であった。翌年、日本教育テレビは昼帯に、《ただいま正午・アフタヌーンショー》（以下《アフタヌーンショー》）を編成した。同番組は《木島則夫モーニングショー》と同様に、月曜から金曜の帯番組であり、昼12時から1時間の生放送であった。《木島則夫モーニングショー》誕生のきっかけは、スポンサーである米ヴィックス社の要望だった。ヴィックス社は朝の「学校番組の一括買い」<sup>11</sup>を希望していた。同局の同時時間帯は低視聴率であったが、アメリカでは《TODAY》というニュースショーが人気を博していた。浅田は「制作費さえかければ、教養番組でも視聴率の上がるものにはできるはずだ」<sup>12</sup>と考えていた。

浅田は、視聴者と同じ地平に立つ、新たな視聴者像を構想していた<sup>13</sup>。メイン司会者である木島は「泣きの木島」の異名をとり、サブ司会者の栗原玲児は「中年の良識」をもつ木島則夫にくってかかり、「青くさい」意見を吐いた<sup>14</sup>。視聴者と同じ地平に立つことで、感情の発露が可能となった。同じ地平に立つ人間が発露する感情は、視聴者が共有することができた。

浅田とともに木島の引き抜きに動いていたのは、編成兼制作局長・岩本政敏であった<sup>15</sup>。塩沢によれば、赤尾は社長から会長に退く際に、岩本を「自分の身がわり」にし「全てをたくし」という<sup>16</sup>。しかし岩本自身は、経営の主軸から「疎外され」ていた<sup>17</sup>。旺文社系の岩本と元雑誌編集者の浅田は、教養派・赤尾の理念に近いところで、新たな番組の開発を企図していた。

司会者の重要性を意識していた浅田は、司会者を「売り込む最も強力な手段」として「木島則夫という名前を題名の頭につけること」を試みる<sup>18</sup>。司会者の名を冠することで「プレゼントの申込み先まで、『木島則夫モーニング・ショー』係にでき」<sup>19</sup>た。プレゼントの応募は最大、1日に30万通を越えた。最多は「平凡社・世界大百科事典」という教養的な賞品であった<sup>20</sup>。

《木島則夫モーニングショー》に対する新聞の評価は、総じて高かった。評価している点は、ながら視聴、多様なテーマ、そしてハプニング性であった。浅田は企画段階から、ハプニング性を強く意識していた。浅田は、「これまでの教養番組が面白くなかったのは、あらかじめ作られすぎていたからではないだろうか」<sup>21</sup>と述べている。

視聴率は、内容見直しの指標でもあった。視聴率というフィードバックには、ひとつのポイントがあった。それは、ディスク・ジョッキーや雑誌的な構成によってもたらされた「分断されたテーマ」である。テーマや内容を分断することで、視聴率はテーマや内容ごとの明確な指標となりえた。テーマや内容の分断は、視聴率の効率を大きく向上させたのである。

### 4. 日本教育テレビのワイドショーにおける司会者像の変化

1964年11月、社長の大川が突然辞意を表明し、代わって赤尾が社長に帰り咲いた。読売新聞1964年11月10日付朝刊は、赤尾の「娯楽放送であっても社会教育的でためになるものを出したい。俗悪もの、エロを売りものにすることはやりたくない」という言を伝えている。赤尾が社長に復帰した4ヶ月後の1965年3月、住友銀行出身の山内直元が社長となった。

1965年、日本教育テレビは朝帯に続き、正午に《アフタヌーンショー》を編成する。同番組の制作が決定したのは、赤尾が社長に帰り咲いていた4ヶ月の間であった。赤尾は、「昼食後のひといきついた時間は、このような番組が喜ばれると思うので、あえて”柳の下”をねらった」<sup>22</sup>という。

1965年4月、日本教育テレビは《アフタヌーンショー》の開始にあたり、NHKからRKB毎日に転じていたスポーツアナウンサー・榎本猛を引き抜いている。さらに榎本以外に6人の司会者を加え、総勢7人の司会者という奇策をとった。しかしながら、この試みは不調に終わった。プロデューサーの江間によれば、7人の司会者で企図したのは、むしろ司会者に頼らず内容で勝負することであり、そのために「あまり性格のはっきりしない」<sup>23</sup>司会者を意図的に選んだという。

プロデューサーの江間は、司会陣のテコ入れに着手する。司会陣に女優の草笛光子が加わり、「ぐんと視聴率も上がった」<sup>24</sup>。しかし《木島則夫モーニングショー》を担当していた浅田は、「ニュース・ショーの司会には、演技は許されない」として、俳優がワイドショーの司会を務めることのデメリットを認識していた<sup>25</sup>。

1966年1月、《アフタヌーンショー》は春の改編を待たずに、落語家の桂小金治をメイン司会者に迎えている。番組名にも桂

小金治の名が冠され、《桂小金治アフタヌーンショー》となった。桂小金治は、後に大きな人気を得ることになる。しかし朝日新聞やNHK出身の上層部は、「ニュースの真実を伝えるべきテレビ局として、落語家や漫才師は相応しくない」<sup>28</sup>などと、桂小金治の起用に強く反対した。元日本教育テレビの丸山一昭によれば、「『モーニングショー』では、視聴率も大事だが中身がもっと大事だ、といった風潮がまだ日本教育テレビには厳然と残っていた」<sup>29</sup>という。

桂小金治の魅力のひとつは、感情の発露にあった。視聴者は桂小金治に共感し、次第に親近感を持つようになった。視聴者への訴求の高まりは、視聴者である主婦の参加要求につながった。

1960年代後半、日本教育テレビは編成戦略を大きく変更している。1967年春からひいていた「M（ミス）M（ミセス）路線」にかわり、1970年10月「ファミリー路線」を打ち出した<sup>30</sup>。ファミリーを狙った番組ジャンルの一つが、クイズ番組であった。読売新聞1969年5月17日付夕刊は、「応募、月に二千人の盛況『タイム・ショック』」という見出しで、クイズ番組の人気を伝えている。視聴者参加の亢進はあらゆるジャンルで進行し、女性以外の各層に動員の対象が拡大したが、一方で、朝昼のワイドショー編成は不変であった。

1968年、木島は《木島則夫モーニングショー》の司会を辞した。1971年6月、木島は参議院議員に転じ、1990年4月、死去している。翌1991年、木島の妻・喜世子は自著において、夫のノートを公開した<sup>31</sup>。《木島則夫モーニングショー》出演当時の木島は、主婦が木島の「幻影」を作り上げ、その幻影が「一人歩きする」とノートに記している。受け手と同じ地平に立つことで視聴者の支持を得た木島であったが、毎日の放送によって生じる現実との乖離を問題視していた。番組を去る直前、木島は「こういうものはアライブ（生きていること）こそ生命で、つくりものはダメだと思っています」<sup>32</sup>と語っている。スポンサーも同様の所感を述べている<sup>33</sup>。

## 5. 後期の日本教育テレビにおけるワイドショーの変容

ワイドショーでは、あらゆるテーマについての教養・知識・情報が媒介されていた。コミュニケーションに参加するためには、そのテーマについての教養・知識・情報が必要であったが、それらは多くの者にとって限られた「資本」であった。

しかしながら情報については、偶然に有する可能性があった。例えば《アフタヌーンショー》では、指名手配犯に関する情報の提供を視聴者に呼びかけている。偶然性を伴わないものとしては、プライバシーなどがあった。例えば「夫婦のプライバシー」は、当人らが納得しさえすれば提供でき、コミュニケーション参加の最低条件を満たした。作り手は高価な賞品を用意するなどしてコミュニケーションを増大させた。競争の激化は編成サイクルを短くし、視聴者を出演者として消費していった。

日本教育テレビ・フジテレビ・NHK教育テレビの開局により放送局の数は倍化し、放送時間も大幅に増加した。ワイドショーにおいても、コミュニケーションが成立するためには膨大なテーマが必要となった。これらのコミュニケーションを恒常的に行なうためには、テーマや情報の提供者や出演者として、視聴者を動員しなければならなかった。

主婦の参加性が高まったとはいえ、送り手からみた主婦の重要性は、主婦が「視聴者」であることにあった。毎日新聞1972年4月2日付朝刊は、ワイドショーを支持する主婦の心理を、「おもしろいのは、ひとつの事件を徹底的に追跡するタイプのもの。妻子を殺したサラリーマンのニュースを現地へ飛んで夫婦の性格や生活を追う番組は、刑事になってナゾときをやっているような気になってワクワクする」と伝えている。石田佐恵子は、1960年代後半から1970年代を「ワイドショーの定着期」と区分し、「現在『ワイドショー的』主題としてイメージされている主題の大半が出現している」<sup>34</sup>としている。

1970年、出演者である主婦に変化がみられる。読売新聞1970年5月30日付朝刊は、ワイドショーに出演する主婦について、「6人のプレイママ」「見事なタレントぶり」という見出しで伝えている。出演に際しては謝金も得ており、一種の「プロ」化であった。《モーニングショー》のプロデューサー小田久榮門は、「『朝ワイド』の顕著な変化は、送り手と受け手の間に差がなくなっていること」<sup>35</sup>と語っている。主婦はワイドショーによって、幅広いテーマについて一定度教養を得ていた。

1972年10月、昼の主婦向けワイドショー《13時ショー》が新たに編成された。同番組は《アフタヌーンショー》直後の13時から、1時間の生放送であった。同番組によって主婦向けワイドショーはさらに拡大し、月曜から金曜の朝・正午・午後の三つの帯となり、夜の男性向けワイドショーをあわせると月曜から金曜で4つの帯が成立している。さらに土曜の朝と昼にもワイドショーが編成され、ワイドショーは日曜を除く全ての曜日に編成されることになった。日本教育テレビにワイドショーが登場して10年の間に、ワイドショーは曜日・時間帯ともに拡大し、総放送時間は週5時間から22時間へと4.4倍に増加した。

読売新聞1973年8月5日付朝刊は、「ワイドショー司会者時代の終わり」と題し、《桂小金治アフタヌーンショー》の終了を伝えた。司会者時代が終わったワイドショーは、その軸足を出演者からテーマや内容へと移した。テーマや内容が流動化したワイドショーにおいて、もはや固定的なのは「番組編成」という時間による規定だけであった。

## 6. おわりに

番組調和原則という番組種別の量的規制のために、教育専門局である日本教育テレビは、83%以上の教育・教養番組を放送しなければならなかった。後発の日本教育テレビは、初期においてあらゆる経験者を大量に採用したが、出版社出身の制作者による教養的な試行のなかから、「ワイドショー（ニュースショー）」が生まれた。

日本教育テレビの番組編成におけるワイドショーの変化をみると、視聴は受像機がある家庭内に限定され、視聴者は朝と昼は主婦が、夜は男性が想定された。送り手は、受け手の欲求・要望に対して無限定に応えたが、そのためにテーマや内容を細分化し、視聴率によって選別していた。また、見直しの高速化のためには、生放送であることが必須であった。

ワイドショーというジャンルは曖昧であったが、曖昧であるがゆえに、採り上げられるテーマや内容は無限といえた。ワイドショーにおいては、テーマや内容の細分化と拡大が同時進行していたが、そこではワイドショーというジャンルの曖昧さと、視聴率という指標の明確さが大きく働いていた。

日本教育テレビにおける初期のワイドショーと後期のそれとを比較すると、教養や情報の流れの逆転が生じていた。初期においては、講師に代表される送り手から受け手に対して一方的に送られたが、中期以降には、送り手が受け手の側のテーマや内容を吸い上げ発信するようになった。テーマや内容が重視されるようになると、相対的に司会者の地位が低下し、より内容偏重が進行した。この現象は、後のワイドショーのイエロー・ジャーナリズム化を生じさせた可能性があるが、司会者の感情の発露もイエロー・ジャーナリズム化と親和性があった。

---

## 補注

- <sup>1</sup> 塩沢茂『ドキュメント・テレビ時代：二十五年史の人間ドラマ』講談社、1978、118頁。
- <sup>2</sup> テレビ朝日社友会編『テレビ朝日社友報18』テレビ朝日社友会、2008、81頁。
- <sup>3</sup> テレビ朝日社友会編『社友報18』テレビ朝日社友会、2008、82頁。
- <sup>4</sup> 同上、82頁。
- <sup>5</sup> 浅田孝彦『ニュース・ショーに賭ける』現代ジャーナリズム出版会、1968、11頁。
- <sup>6</sup> 朝日新聞1961年1月31日付朝刊。
- <sup>7</sup> NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会、2003、20頁。
- <sup>8</sup> 同上。
- <sup>9</sup> 毎日新聞1961年6月15日夕刊。
- <sup>10</sup> 浅田、前掲書、12頁。
- <sup>11</sup> 全国朝日放送(株)総務局社史編纂部『テレビ朝日社史：ファミリー視聴の25年』全国朝日放送、1974、98頁。
- <sup>12</sup> 浅田、前掲書、10頁。
- <sup>13</sup> 同上、71頁。
- <sup>14</sup> 毎日新聞1966年2月28日付夕刊。
- <sup>15</sup> 浅田、前掲書、63-64頁。
- <sup>16</sup> 塩沢茂『放送エンマ帳』オリオン出版社、1967、42頁。
- <sup>17</sup> 同上、43頁。
- <sup>18</sup> 浅田、前掲書、105頁。
- <sup>19</sup> 同上。
- <sup>20</sup> 浅田、前掲書、207頁。
- <sup>21</sup> 浅田、前掲書、42頁。
- <sup>22</sup> 読売新聞1965年2月27日付夕刊。
- <sup>23</sup> 江間守一『この放送には聴取料がありません』時事通信社、1974、167-170頁。
- <sup>24</sup> 読売新聞1965年7月19日付朝刊。
- <sup>25</sup> 浅田、前掲書、254頁。

- <sup>25</sup> 渡邊實夫「東京のかたすみから(25)テレビの始めから終わりまで」『中川根ふる里通信』第52号、モアラブ中川根、1999年10月、12-13頁。
- <sup>27</sup> テレビ朝日社友会編『社友報18』テレビ朝日社友会、2008、97頁。
- <sup>28</sup> 全国朝日放送(株)総務局社史編集部、前掲書、169頁。
- <sup>29</sup> 木島喜世子『私と木島則夫の闘い：癌と老いと2500日』リム出版、1991、220-270頁。
- <sup>30</sup> 毎日新聞1968年1月30日付夕刊。
- <sup>31</sup> 角間隆『テレビは魔物か』潮出版社、1977、207頁。
- <sup>32</sup> 石田佐恵子『有名性という文化装置』勁草書房、1998、109頁。
- <sup>33</sup> 毎日新聞1971年5月4日付夕刊。

## 参考文献

### 【史料】

(雑誌・新聞等)

- 『朝日新聞』朝日新聞社、東京版。  
『月刊テレビ・メイト』NETテレビ広報部宣伝課。  
『テレビ朝日社友報』テレビ朝日社友会(1990年から年1回刊行)。  
『毎日新聞』毎日新聞社、東京版。  
『民放くらぶ』日本民放クラブ。  
『読売新聞』読売新聞社、東京版。

(年史・著作等)

- 浅田孝彦『ニュース・ショーに賭ける』現代ジャーナリズム出版会、1968。  
浅田孝彦『ワイド・ショーの原点』新泉社、1987。  
江間守一『この放送には聴取料がありません』時事通信社、1974。  
角間隆『テレビは魔物か』潮出版社、1977。  
木島喜世子『私と木島則夫の闘い：癌と老いと2500日』リム出版、1991。  
木島則夫『おはよう木島則夫です』講談社、1966。  
塩沢茂『放送エンマ帳』オリオン出版社、1967。  
塩沢茂『ドキュメント・テレビ時代：二十五年史の人間ドラマ』講談社、1978。  
全国朝日放送(株)総務局社史編集部『テレビ朝日社史：ファミリー視聴の25年』全国朝日放送、1974。  
テレビ朝日 社史編集委員会編『チャレンジの軌跡』テレビ朝日、2010。  
日本放送協会編『日本放送史』日本放送協会出版、1966。  
日本放送協会編『放送五十年史』日本放送協会出版、1977。  
日本民間放送連盟『民間放送十年史』岩崎放送出版社、1961。  
日本民間放送連盟『民間放送五十年史』岩崎放送出版社、2001。

### 【研究書・研究論文】

- 石田佐恵子『有名性という文化装置』勁草書房、1998。  
石田佐恵子「家庭空間とワイドショー的世界：ワイドショー・ジャンルの成立と拡散」『大衆文化とメディア』ミネルヴァ書房、2010。  
石山玲子・川上善郎・大石千歳・鈴木靖子・松田光恵「ワイドショーの構造分析：形式の概念化とスタジオトークとの関連性」『成城大学コミュニケーション紀要』17、2005年3月、97-128頁。  
NHK放送文化研究所編『テレビ視聴の50年』日本放送出版協会、2003。  
後藤和彦『放送編成・制作論』岩崎放送出版社、1967。  
佐藤卓己『テレビ的教養：一億総博知化の系譜』NTT出版、2008。  
谷島貫太「バルナール・スティグレルの『心権力』の概念」『理論で読むメディア文化』新曜社、2016。  
西野泰司「日本のテレビ編成」『放送研究と調査』1993年2月号、NHK出版。  
日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究』28号、日本放送出版協会、1976。  
日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究(日本のテレビ編成)：別冊2』日本放送出版協会、1981。  
日本放送協会総合放送文化研究所放送学研究室編『放送学研究(日本のテレビ編成)：別冊3』日本放送出版協会、1984。  
日本民間放送連盟・放送研究所編『放送の公共性』岩崎放送出版社、1966。  
古田尚輝「『鉄腕アトム』の放送に関する時代考察：編成と産業の視点から」『成城大学コミュニケーション紀要』17、2005年3月、47-95頁。  
古田尚輝『鉄腕アトムの時代：映像産業の攻防』世界思想社、2009。  
古田尚輝「教育テレビ放送の50年」『NHK放送文化研究所年報』第53集、日本放送出版協会、2009、175-210頁。  
松井英光「〈送り手〉と〈作り手〉を分離した視座によるテレビ研究の再構築」『広島大学大学院総合科学研究科紀要・III、文明科学研究』10巻、2015、13-36頁。